

# うまい「たまねぎ」を目指した 松田農場

(足寄町 松田 和幸 氏)



写真 有機栽培実践者（左から松田えみ子さん、和幸さん 博幸さん 真由美さん）

## 1 経営の概要

- (1)有機栽培経験年数 約26年
- (2)経営規模 23.3ha（うち有機栽培 4.7 ha）
- (3)労働力 家族労働4人
- (4)作物作付面積及び生産量（平成21年）

区分	品目	作付面積	品 種	生産量(kg/10a)	総生産量
有機	たまねぎ	1.7 ha	オホーツク222	4,000 kg	66 t
		1.7 ha	きたもみじ2000	4,300 kg	71 t
	緑肥	1.3 ha	サイヤー		
一般	たまねぎ	1.7 ha	きたもみじ2000	4,300 kg	73 t
	秋まき小麦	5.6 ha	きたほなみ	660 kg	37 t
	小豆	2.0 ha	とよみ大納言	222 kg	4 t
	菜豆(手亡)	0.3 ha	雪手亡	180 kg	1 t
	てんさい(直播)	5.6 ha	リッカ、フルーデンR	4,000 kg	224 t
	とうもろこし(サイレージ用)	3.5 ha	パイオニア85	7,400 kg	259 t
合計		23.3 ha			

## 2 有機農業取組の経緯等

### (1) 有機農業の取組動機

- ・自家菜園の野菜は「無農薬栽培」で行うことが方針であった。ここからスタートした。
- ・昭和58年の冷害により、土づくりの重要性を認識した。
- ・農薬によるアレルギー体質となり、有機農業の大切さを実感したことから取組みを始めた。

### (2) 取組経過

- ・43年前就農し、経営に参画した当時は面積規模が小さく（5ha）、農業粗収入が低かったため収入を高めたいと考えていた。
- ・自家菜園でのたまねぎ苗を1坪分譲り受け栽培してみたところ、高収量・高品質のものが収穫できた。
- ・昭和59年に、経営としてたまねぎを導入し、1坪から有機栽培に取り組み、規模拡大を進めてきた。
- ・収量が不安定であったが、6年前から安定収量となってきた。
- ・後継者も就農し生き甲斐を持って取組んでいる。
- ・平成18年に有機JAS認定を取得。

### (3) 有機農業への取組みの考え方（こだわり）

- ・おいしいたまねぎにこだわった、たまねぎ作り。
- ・バイヤーとの信頼関係を大切にしている。

## 3 有機栽培管理技術等の特徴

[有機栽培管理の概要]

### ■たまねぎ

作業体系(生産性：4,000kg/10a（平成21年産） 規格L・L大主体)

3月育苗	5月上旬	5/中～9月	8月下旬	9月	10～3月
は種	移植	手取除草	根切り	収穫	調整・出荷

[栽培管理技術等のポイント、工夫]

### (1) 土づくり

- ・緑肥栽培による土づくりを実施。
- ・家畜糞尿は過去に使用していたが、雑草の発生が多くなり使用を現在控えている。
- ・ぼかしを400kg/10a使用。約10年前まではぼかし製造を行っていた。  
しかし、製造にかかる労力が重荷になったこと、また、ぼかし原料の確保が困難になったことから現在は作らなくなった。
- ・微生物資材により、土壌条件がよくなってきている（春先の施肥効果が、昔は見えなかったが、現在は生育が良くなってきた）。



写真 土づくりの成果による苗の状況

- ・微生物資材を育苗土、ほ場にも施用することにより、糖度が高く（12～13度）なったり、病害（乾腐病）に対して強くなったと感じている。



写真 土づくりの成果によるほ場での状況

(2) 病虫害防除

- ・害虫対策として松節油を利用。
- ・病害対策として粃殻酢を利用。



写真 見事に育ったたまねぎ

(3) 雑草対策

- ・移植後、1週間後くらいからカルチを実施。2回目は1回目のカルチ後2～3日後に実施。その後、概ね1週間間隔で実施。
- ・機械除草ができなくなると、パートさんによる手取除草を実施している。



写真 パートによる除草作業

#### 4 生産物の出荷・販売

- ・ 関東・九州方面に 120 t、北海道有機農業協同組合には 80 t 出荷している。
- ・ 道内の有機栽培たまねぎ耕作者と連携を取り、出荷を切らさないように取組みを実施している。
- ・ 販売方法については、口コミで広がり現在に至っている。
- ・ 信頼が重要であるため、品質には十分な注意を払って作業を進めてきたことにより、消費者との信頼関係が構築できてきた。



写真 出荷時のたまねぎ

#### 5 生産者のつながり、関係機関・団体等との関わり

- ・ 道内の志をともにした有機たまねぎ生産者（本人含め3戸）と、連携をとり出荷計画などを打ち合わせ出荷している。
- ・ また、流通業界と連携して、プラスチックコンテナを利用しトラック便で輸送しているため、箱代金と比べると、低コストで流通している。

#### 6 今後の課題と方向

##### (1) 今後の課題と取組の方向

- ・ 肥料資材取扱業者とJAとの連携を図り、有機質資材の提携を結んでいくように進めていきたい。
- ・ **消費者の一層の信頼確保に向けて平成21年12月にJGAPを取得した。**
- ・ 今後は、新規作物（ハウス栽培アスパラガス・にんにく）の導入も検討していきたい。

##### (2) 新たに有機農業に取り組もうとする人へのアドバイス

- ・ 本当に有機農業に取り組みたい方がいたら、地域によって条件などは違ってくるだろうが、持っているノウハウをすべて提供していきたいと考えている。

〈作成：十勝農業改良普及センター〉